

48

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月06日 11:45:09

2011年01月06日 11:45:09

入館証番号:

入館証番号:

Call Slip

<請求票>

3021
1
72

Call Slip

資料名: 日本論 竹内好解説

巻次:

著者名: 戴季陶//著

出版者: 社会思想社 頁数: 249p

大きさ: 19cm 出版年: 1972

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンタ

配置場所: 1/66B 中)B1書庫B

資料ID: 1123589814

新東自人社	力	事
↓		
新東自人社	請求	報告
MB 1	マイカ	B1 アルファベット 原紙 縮刷
MB 2	マイカ	B2 洋 中 朝
行	1F	B1 B2
多	児 青	1F B1 B2

切り取り

<請求票>(控)

書名
資料名: 日本論 竹内好解説
巻次:
著者名: 戴季陶//著
出版者: 社会思想社
出版年: 1972
大きさ: 19cm
頁数: 249p

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンター

配置場所: 1/66B 中)B1書庫B

資料ID: 1123589814

請求記号

3021
1
72

2~枚 ~ 8

P. 227 ~ 245

例言

- 1、本書は戴季陶著『日本論』の全訳である。
 - 1、訳出にあたっては、上海民智書局一九二八年再版本を底本とし、台北中央文物供应社一九五四年版を参照した。
 - 1、原注である旨をことわつたもの以外、注はすべて訳注である。
 - 1、この翻訳は、雑誌『中国』の一九六八年七月号から六九年三月号まで連載したものである。
 - 1、『日本論』の日本語訳には、次の四種類がある。訳出にあたって、いずれも参照させていただいた。
 - 1 下畝常吉、和泉生訳。『北京週報』（北京燕農社発行の日本語雑誌）に連載。昭和三年二月（同四年五月）。
 - 2 安藤文郎訳。享華社。昭和一〇年。
 - 3 森豊大訳。官界情報社。昭和一六年。
 - 4 藤島健一訳。世界思潮社。昭和二年。
- ほかに、玉島信義編訳『中国の日本観』に抄訳がある。

一 中国人が日本問題を研究する必要性

中国人で日本に留学したものは、かなりいる。正確な数はわからないが、たぶん最低十万人は下るまい。この十万人の留学生が、「日本」というテーマでどんな研究をやつたか。三十年前に黄公度先生⁽¹⁾があらわした『日本国志』という本以外に、日本を専門に取りあげた本は見ることがない。私自身も、日本に関する系統的な研究はなにもやつていないし、まとまった本も書いていない。わずかに民国六年（一九一七）『民国日報』紙上に四十日連載の文を書いたぐらいのところである。しかもこの文は、当時の政局と、十年にわたる日本側の提唱する「親善政策」なるものを批判しただけで、とても「日本」論といえたものではない。ただ私は、この十数年、一つの希望だけは抱いていた。それは「日本」というテーマで、歴史研究に即して、その哲学、文学、宗教、政治、風俗、およびそれらの諸事象を成り立たせる原動力を、自分の思索力および批判力を通して、中国人の前に、きちんと解剖し、展示してみせたいという希望である。いかんせん、意あまつて力足りず、古代研究の領域でいえば、日本の本すらろくに読んでいない上に、東方諸民族の言語に不案内であり、さらに中国の歴史についてささ研究らしい研究を積んでいない。とても日本の古い文献など調べるだけの力は私にはない。それなら近代研究の領域はどうかというに、これまた私は、かれらの社会に深くは入り込み、じ

かに体験を通して理解を身につける余裕がなかった。したがって、多少とも有意義な、まとまった日本論を書くだけの力は、いまの私にはない。ただ、十年あまりにわたって、ごく皮相な、また断片的なものではあるが、感じたものがないわけではないので、その一端をここに述べようと思う。いま一般の注意が日本問題に向けられている際なので、そんなものでも案外多くの人の役に立つかもしれない。

6

ためしに日本の本屋へ行つて、日本人の書いた中国関係の本がどのくらいあるか、見てみるがよい。哲学、文学、芸術、政治、経済、社会、地理、歴史、あらゆる部門、あらゆる問題をあつかった本が何千種もあるではないか。毎月の雑誌にのる「中国問題」をあつかった論文だけでも何百篇もあるではないか。参謀本部、陸軍省、海軍軍令部、海軍省、農商務省、外務省、各種団体、各種会社、これらの機関が長期調査または短期視察のために中国へよこす人員だけでも、毎年数千人に達するではないか。かりに最近出版された叢書だけでみても、一冊五百ページ以上、一部十冊以上のものが何種とあり、一千ページを超える大著すら巨巻以上もある。日本人は「中国」というテーマを、解剖台にのせ、すでに何千回となく解剖し、また試験管に入れて何千回となく実験しているのだ。それにひきかえ、われわれ中国人は、ただ排斥と反対のいつてんばりて、研究はおろか、日本字は見るのもいや、日本語は聞くのもいや、日本人には会うのもいや、これではまるで「思想における鎖国」「知識における義和団」も同然ではないか。

以前、私が日本で勉強していたころ、同学の友人が何人もいたが、かれらはみな日本語や日本文の研究をきらった。なぜきらうのか、理由をたずねると、答えは二つあった。一つは、英語なら帰国してから役に立つが、日本語や日本文は役に立たない、というのである。もう一つは、日本そのものには研究価値がない、なぜなら、中国やインドやヨーロッパから輸入したもの以外に何もいからだ、というのである。この二つの理由は、前者は「実利主義」、後者は「自大思想」の弊に陥っている、と私は思う。ここ十年、日本留学生は数がへつたし、速成学生はなくなった。そして大学の文科生などで、日本の本にも親しむものが少数だがあらわれた。そのため、日本の文学や思想などの紹介もたまに目につくようになった。ただそれらは、近代だけに限られており、しかも簡単すぎる。日本の歴史を全体としてとらえ、論評することによつて政治家の参考に供するようなのは、ほとんど見かけない。

私は、今後、中国人はもつと真剣に日本研究に関心を向けるべきだと思う。日本人の性格はどうなのか。思想はどうなのか。風俗習慣はどうなのか。国家および社会の基礎がどこにあるのか。生活の根柢はどこにあるのか。これらすべての点にわたつて、真剣に研究しなければならない。日本の過去がわからなくては、日本の現在がどこから来たのか、わかるわけがない。現在の実情がわからなくては、将来の動向を推察することはできない。むかしから言うではないか、「おのれを知り彼を知れば百戦百勝」(孫子)「謀政篇」彼を知り己を知れば百戰して殆^{あやう}からずと。日本に反対し、日本を排斥するもの

7

結構だが、そのためにはまず日本を知らなくてはならない。それだけではない。学問からいっても、思想からいっても、また種族からいっても、日本という民族は、極東において、中国を除けば、最大の民族なのだ。その歴史は、中国、インド、ペルシア、マライから朝鮮、満州、モンゴルにまで関係が及んでいる。しかも、ここ三百年あまりの期間において、世界文化史に占める日本の地位はきわめて重要なのである。であるから、単に学問の領域だけにかぎっても、いろんな角度で専門研究をやる価値と必要があるわけだ。ぼんやり放置しておいてはならない。

私の日本観がまちがっていないかどうか、これは、また別の問題である。私としては、多くの人が私の誤りを指摘してくれることを希望する。もしその批評から、もつと有意義な著作が導き出せたら、この小著もそれ相応の役割を果たしたことになるから。

訳注1) 黄公度の『日本国志』

黄公度(一八四八―一九〇五)、名は遵憲^{ツンセン}。清末の詩人、外交官である。一八七七年から約五年間、日本に滞在した。その間、『日本国志』の執筆を始め、帰国後、一八八七年に全四〇巻を完成。内容は、国統志、郷交志、天文志、地理志、職官志、食貨志、兵志、刑志、學術志、礼俗志、物産志、工藝志の十二の分野にわたる。明治十年代の日本の現勢を、総合的に具体的にとらえようとしたものである。

(2) 『民国日報』紙上に四十日連載の文

「日本観察」(關於日本的観察)という題だったらしい(陳天錫「載孝陶先生の生年」)。その翌々年(一九一九)、『建設雜誌』に『私の日本観』(我的日本観)を発表した。これは『日本論』前半(一四章「板垣退助」まで)の原形である。

二 神権の迷信と日本の国体

それぞれの民族は、それぞれに固有の神話をもっており、そのことは歴史的に大きな意義を有する。日本人も、従来、一つの迷信をもっていた。それは、自分たちの国体、自分たちの民族が、神によつて造られたもので、世界のどこにも比類がない、というのである。そして皇帝こそ、神の直系の子孫であつて、さればこそ「万世一系、天壤無窮」だといふ。

ヨーロッパの科学思想が日本に輸入されて後、科学者たちは、ようやく迷信から離れ、こうした神話は科学の研究法によつて整理し直さなければならぬと考えるようになった。ところが学者のなかには、いまでも迷信にこり固つたまま、神話をそのまま一点あやまりのない事実だと思ひ込んでいる人も若干いる。以前、私が習つた先生で、名を寛克彦^{カンカク彦}(一八六二―一九六一、東大教授、国学院大教授)という、国法学の専門家がいる。この人は、学問の点ではきわめて広く、かつ深かつた。しかも、私たちが憲法学の講義を受けたころは、かれの思想はきわめて進歩的だつた。私自身は、思想的にかれから多くのもを学んだ。そのころのかれの法理論は、法文ばかり重視して理論を軽視する当時の日本の法学界において、あきらかに革命的色彩を帯びるものであつた。ところが、かれはその後、少しずつ迷信のほりに近づきはじめ、近ごろの著作では、ほとんど神話と紙ひとえになつた。しかもかれの場合

近代化がすばらしかつただけほめているものが多い。日本の明治以後の発展を考えていく上で戴季陶は大いに参考になる。

竹内 わたしが一つ感動したのは、水平運動、つまり部落解放運動が日本の革命の原動力になるだろうという見方です。これは予測としてははずれたわけだが、当りはずれを度外視していい線いつているね。

雑誌『中国』一九六九年一月号より転載

戴季陶の『日本論』 竹内 好

戴季陶という人の書いた『日本論』という本のことをお話いたします。この本は一九二七年に書かれ、二八年に上海で出版された非常に古い本ですが、台湾では今でも続刊されております。日本では戦前と戦後に数回翻訳が出されましたが、当時あまり評判になりませんでした。これが西洋人の書いたものと、ずいぶんいい加減なものでも紹介されて評判になるのですが、中国人や朝鮮人の書いたものは、とかく軽んじられて、読書界に歓迎されないようです。やはり西洋崇拝の気風が今でも残っているせいでしょうか。じつは戴季陶のこの本は、数ある外国人の日本に関する著作のどれをとってみても、けっしてひげをとらない、すぐれた作品であります。ですから、それが埋もれてしまうのは残念なので、改めて自分の雑誌で紹介したわけであります。

戴季陶は、若いころ日本に留学し、ジャーナリストとして身を立てました。そのころは戴天仇と名のつたので、日本ではこの名のほうが通っております。のちに国民党に入り、孫文の秘書を長くつとめました。孫文のお伴をして日本に来たこともあるし、代理として来たこともあります。孫文と日本の政治家との間の談合に、ほとんどの場合に立ち会っています。ですから、日本の政治事情に通じていることはむろんですが、それだけでなしに、日本の社会事情全般について、相当深く、裏の裏まで

わかっているようでありませぬ。これは『日本論』をお読みになれば感得されるでしょう。

国民党という政党は、はじめは秘密結社でした。一九二一年の革命によって共和国ができ、そこではじめて合法結社になります。その後何度か名前が変わって、最後に国民党と名のるわけです。この指導者が孫文でした。

孫文は一九二五年に亡くなります。すべての政党がそうであるように、国民党にもいろいろの派閥があったのですが、首領の死によってそれが一挙に顕在化しました。ふつり、大きくわけて右派と左派と申します。そして戴季陶は右派の代表的な論客であります。

そのころの国民党は、軍閥を倒して全国を統一するという共同の目標のもとに、共産党と提携しておりました。この提携を将来もつづけるべきだというのが左派の主張であり、共産党と手を切るべきだというのが右派の主張であつたと大ざっぱには考えていいでしょう。

とかく右というと、頑迷という印象がつきまとうのですが、そう単純に割り切ってしまうと真相を見あやまることとなります。戴季陶が国民党右派であるというのは、かれには独自の共産党批判があつたからであつて、そのことは『日本論』のなかでも随所に触れられています。つまり、相手の共産党が当時どんな状態にあつたかを見ないとわからない。かれは孫文の思想を崇拝し、あくまで孫文の遺志に忠実に従うという自覚のもとに共産党に反対したのです。

そのころの中国共産党は、各国の共産党がそうであつたように、コミンテルンの支部でありまし

た。コミンテルンは世界共産党なので、つまり世界革命のための一元組織であるべきなのですが、実際は力関係によって、ロシア共産党の支配が強く、だんだんロシア一国の利益が優先して、他国はその犠牲に供されるような動きが出てまいります。そうすると、本来は中国の革命のために共産党と提携したのに、かえって中国の利益が犯されるという不満がおこる。インターナショナルの大義名分が、じつはナショナルなエゴイズムに墜落してしまっているのではないか。これは不当である、というのが戴季陶の考え方であります。

そういうナショナリストが右派とよばれるのであつて、ですから単純な頑迷ではないのです。この辺のことは中国の近代史を眺めますとき、その複雑な動きをよく注意しなければなりません。

『日本論』のなかに、中国の政局は以前は東京のコントロールの下にあつたが、いまではモスクワの指揮下にある、と述べた個所があります。つまり戴季陶は、日本政府からの内政干渉にも反対するが、同時にモスクワ政府からの干渉も受けたくないという考え方なのであります。革命はあくまで自力を頼る以外にない、他人の力を借りてはならない、いや、援助はよいとしても、力による強制は絶対に認められない、ということでもあります。

その証拠に、かれは別の場所では、共産党の若い連中がうらやましい、献身的に革命運動をやつてゐる、あれでなくてはだめだ、それにくらべると国民党員は、打算的であつて、革命運動を出世の道具に使つてゐる、じつに嘆かわしい、という意味のことを述べております。こういふふうに、自分を

鞭うつことじつに厳しいのであります。『日本論』はその名のとおり、日本を論じたものであります。が、ただ客観的な観察を述べるのではなく、それを鑑^{かん}にして、自国民の懦弱^{じゆうじやく}をせめる、国民の模範であるべき革命党員の腐敗を糾弾する、そうした姿勢に貫かれているのでありまして、その真剣さには読んでいてまったく頭がさがります。これは戴季陶の『日本論』が他の類書と異なる第一の点であります。

国民党と共産党は、一九二七年の蒋介石のクーデターによって協調が破れ、軍事対立の段階に入ります。そしてその過程で、いろいろいきさつはありますが、最後に共産党はコミンテルンと絶縁するわけです。これが毛沢東コースで、共産主義の土着化、あるいは民族化ともいわれ、また共産党の立場からは、共産主義理論と革命の現実との合体として説明されるものですが、これは見方によれば戴季陶の批判が正しかった証明といえないこともありません。少なくとも、コミンテルン時代に反共であつたからといって、その後も永久にかれが反共であるとはいえないわけでありまして、もともと戴季陶自身は、だんだん政界の第一線から引退いたしましたので、その言行から証明を発見することは困難です。

かれが右派に分類されるもう一つの理由は、孫文主義の解釈に当って、中国の民族的伝統を重んじ、西欧の学説の直輸入を排する態度が鮮明であることが関係していると思います。『孫文主義の哲學的基礎』という本がその代表作であります。この点は、あとで『日本論』の内容を説明するときに

改めて触れます。

ここで、もう一度発端にもどって、なぜ私がいま戴季陶の『日本論』をとりあげる気になつたか、そこにどういふ意味を感じているか、その点を述べさせていただきたい。こんな土ぼけた本を引っぱり出す動機はいつたい何か、ということでありまして。

ご承知のように、戦後二十数年になりますが、日本はまだ中国と国交を回復しておりません。法的には交戦状態のままです。他の連合国とは講和したのに、中国とだけは講和していない。もともと、戦後に中国で革命が起こつて、新しい國家が誕生したということも一つの作用を及ぼしております。当時の日本政府が、革命によって台湾に追われた旧政権と講和してしまったのです。これは歴史的に見て大失敗でありまして、さらでも困難な中国との講和をいつそ困難にいたしました。国民政府との間に講和しているから、もう中国との講和はすんでいるという論が一部にあります。これは詭弁であつて、国内はともかく、国際的には通用しない議論であります。

私は戦後、中国との講和を目標とする言論活動をやってまいりましたが、数年前にもうあきらめました。なぜあきらめたかと申しますと、戦後の歴史をずっと見てまいりまして、日本の歴代政府は、口さきはともかくとして、本心は中国と講和する気がないんだということがわかつたからであります。政府の方針は一貫して講和しない、いや講和しないばかりでなく、あくまで中国と敵対関係をつづける、いろいろの事情から判断しまして、それしか考えようがない。そのことが見抜けなかつた自

分はなんとべかだったか、ときとりました。

かりに政府がそうであるにせよ、もし国民に講和の意志があるなら、政府を動かして講和させることができるはずではないか、また、政府が動かなければ、政府を取りかえることができるはずではないか。ところがそれができない。してみると国民に意志がないことになります。意志がないというより、たぶんそんな未解決の大問題があることを恐れてしまったのでしよう。政府はともかくとして、国民がこれではどうにもならない。私も国民の一人ではありますが、国民の一人として自分に我慢がならない。ですからあきらめるほかありません。

私は中国の肩をもつとか、または共産主義がすきたからという理由で、こう申すではありません。日本民族の主体的な立場において、道義が失われることをおそれるからであります。道義が失われることは、歴史が空白になることであり、いわば生命がなくなることでもあります。国家の行為としての戦争は、ある条件のもとでは認めるよりほかありませんが、それにしても戦争に負けたら、負けたといさぎよく言うべきです。それを負けたといわない。おまけに強い者を連れてきて、その蔭にかくれて強がりを使う。これは卑怯というものであつて、道義とは反対のもの、すなわち悪であります。

もちろん、国際政治は複雑なものであるから、いろいろ困難はありましよう。どんなに熱心に望んでみても、講和が一朝一夕に実現できない事情はわかります。けれども、困難は克服すべきものであ

つて、口実にするべきものではありません。困難を口実にして努力を放棄するのは道義の頹廢であります。

戴季陶は『日本論』で、日本民族の倫理性を高く評価しております。そしてその規範意識を集中的に武士道に求めております。武士道は発生的には「奴道」すなわち封禄に対する反対給付であつたが、それを普遍的な倫理に高めたところに日本民族性の優秀さがあり、それが近代化への適応を可能にした、というのがかれの見方であります。これはべつに卓見と申すほどのことではないかもしれませんが、そういう説はほかの人にもありますから。しかし戴は、一方で、この本を書く前に最後に日本を訪れたときの観察をも記しています。それは、二十年前にくらべて日本人の「尚武」の気風がいぢるしく衰えたという観察であります。私はこれを読んだとき、はじめは不思議に思いました。日本の政治が決定的に軍国主義に傾いたことを指摘しているその同じ時期に、「尚武」の気風が逆に衰えたというのです。軍国主義化と「尚武」の衰えがセットになっている。変ではないか。しかし、よく考えてみれば変ではないのです。それはまさにセットであるべきで、政治の軍国主義化が国民の道義を頹廢させ、無気力にした一面と、国民が無気力になり、勇気をなくした結果として、逆に軍国主義をはびこらせたこととは当然セットになるべきものであります。かれが日本人の美德と認めた「尚武」は、弱い者いじめの暴力や略奪行為とは反対物だったわけです。

戴季陶に指摘された後、日本人はますます「尚武」の精神を失い、大陸侵略に乗り出していった。

そして戦争に負けても、負けたとシャツホを脱ぐことをしないで居なおるほどにまで徹底して非「尚武」的になったわけでありませぬ。戴季陶の生存中すでに衰弱の兆候を見せていた日本人の民族的道義は、かれの死後ますます頹落の歩度を早めたといわねばなりません。そういう眼で『日本論』を読むとき、皮肉はまさに痛烈であります。

去年、創価学会の池田会長が日中問題について所感を発表されました。戦争終結のできない現状を日本民族の道義の問題として、民族の良心の痛みとして、改めて問題にされた点に私は深い感動を受け、講演のその部分を自分の雑誌に転載させていただきました。中国との国交回復は、中国のためではなく日本のためであること、利欲のためでなく道義のためであり、民族の再生のためであることを肝に銘じなければなりません。

なぜ国民がこの問題に不感症になったか、すなわち、なぜ民族の道義がこれほど頹落したか。戴季陶の用語を借りるなら、強烈な倫理要請にまで陶冶された「武士道」がなぜ元の「奴道」にまで退化したのか。私は知的職業になずさわる人間として、この問題を知的に解く道しかありませんが、そこで考えたことは、これは歴史を忘れたことが一半の、あるいは大半の原因ではないかということでした。戦争のあったという歴史を忘れ、また、なぜ戦争がおこったかという歴史を忘れた。私は政治のことはあきらめているのです。公明党の活躍に期待はしますが、必ずしも樂觀はしていません。で、自分のできる範囲で、歴史の復習をやるしか方法がありませんので、『中国』という小さな雑誌をつ

くって、もつぱら古いことを掘り起こしています。古いことはやりやらないで、もっと新しいことを紹介しろという読者の強い要望があるのですが、私はむしろ、忘れていた古いことに今の問題があると考えているのです。古いもののほうが新しいという逆説がいまは成立するように思います。そのため戴季陶の『日本論』のような古い文献を掲載しました。中国の文化大革命とか、日中の友好とか、そうした問題についてたくさんの文章が発表されており、それはそれでよいのですが、私はまず良心への痛みから再出発したいのであって、そのためにはこの本は恰好な材料であります。いまの中国では、戴季陶の名はもうほとんど記憶されていないでしょうが、それはそれでよい。われわれはこの名を記憶によびもどすことがますます必要であると思います。

さて、いよいよ内容の紹介にはいるわけですが、あまり時間もなく、論旨の全部を紹介できませんので、ここではごく一部の重要な点だけを取り出すことにいたします。興味をおもちの方はぜひ自分で全文をお読みください。

『日本論』の最大の眼目は、当面の田中義一内閣の政策を批判することにあります。田中内閣は明治以降の藩閥政府の最後の牙城であり、かつ、世界的な反動の風潮を東方で代表するチャンピオンである。したがって当然に、世界の民主勢力、または民族独立の動きとは眞向から対立するものであり、とくに中国の革命運動とは鋭く対立する。この対立はほとんど融和しがたいものであって、おそらく全面的な破局へ向かって進むであろうという見通しを立てております。

孫文にしろ戴季陶にしろ、日本との提携によってアジアを復興させる、つまりアジアを帝国主義の支配から独立させ、建國を可能にする、という希望は終始一貫しておりました。そのためには日本が内政干渉をやめ、軍閥援助をやめ、国民党による全国統一に道義的な支持を与えなければならない、というのが国民党の対日外交方針であります。そしてそれは可能である、というのがかれらの考え方です。なぜなら、中国の革命運動は、日本の明治維新と本質は同じものであるから、もし日本に維新の精神が失われていないなら、当然に提携が可能だという論理であります。

ところがこの期待は、事ごとに破られます。そしてついに反動中の反動である田中義一が政權を握るという事態にまでなった。では、どうしてそうなったか。この問題を解かなければならないというので、はるかに神話時代から現在までの日本の全歴史をよまえて、いったい日本民族とは何なのか、それは文明に対してどういう寄与をしているか、という観点で当面の問題を解こうとしたのがこの本のかかれた動機であります。

田中内閣は一九二七年四月に成立して、二年あまりつづきました。田中義一は首相のほかには外相と拓相を兼務しております。田中内閣が最初にやったことは、国民革命軍が全国統一を目指して北上するのを阻止するために山東へ出兵したことす。つまり中国の革命を武力で干渉したのです。かれは以前に原内閣の陸相だったとき、ロシア革命に干渉してシベリア出兵をやっておりますから、まさに反動の巨頭と見られるだけの実績があるわけでありまして。日本では田中外交のことをふつう積極外交

とか強硬外交とかよびますが、もっと適切には革命干渉外交とよぶべきでありましょう。国内的にも、三・一五とか四・一六とかの共産党弾圧がかれの手でなされました。しかし、どんなに干渉しようとも、革命は抑圧できるものではありません。シベリア出兵も失敗したし、山東出兵も失敗しました。一度は氣勢をそがれたけれども、国民革命軍はやがて盛り返して、北京から軍閥を追っばらって全国統一を成しとげます。追っばらわれた最後の軍閥である張作霖は、逃げる途中で日本の出先き軍の手で列車ごと爆破されてしまいました。日本が尻押ししておいて、役に立たなくなると殺してしまう。この陰謀は田中が直接やったわけではないが、やはり責任は田中にあります。というのは、これは滿蒙独立計画、すなわち滿蒙を日本の独占的な植民地にし、それを足場にして中国全土に侵略を進めるといふ大計画の一部なのであつて、その大計画を立案したのが田中だからであります。

この大計画は、田中メモランダムという名で世界に知られています。中国では田中上奏文と申します。専門家の間では偽作とされていますが、かりに偽作であるにせよ、その元になるものはあるのです。田中内閣は二度にわたって東方会議というものを開いておりまして、そこでは対支政策綱領というのを作っております。その内容が、いま申しあげたようなものなのです。

ですから、その後の動き、日本を破局へ追いやった国策が最終的に決定されたのは田中内閣のときである、ということは今日からふり返つてみて疑いありません。筋書きのとおりに行進して、変更がなかったのですから。してみると戴季陶が、田中内閣の成立のときに、これが最終決定であると

いう判断をくださったのは、じつに先見の明があったと申さねばなりません。『日本論』は、日本国民にあてた最後の勸告であると同時に、中国国民に向って警鐘を打ち鳴らしたものでありますが、われわれの側は当時そのように受けとらなかつた。それが予言の書であることに気がつかなかつた。この不幸が今日まだつづいていて、そのため中国との国交回復ができないという状態になっているのだとも申せます。おくれせながら、いまからもう一度『日本論』を読む必要があるわけでありまして。

なぜそうなったか。戴季陶の考え方を簡単に申しますと、禍根は軍国主義にあります。そして軍国主義は国家主義から導き出されたものであります。すなわち明治維新によって作り出された国家が、他の選択を排して国家主義に傾斜したことにかれは問題を発見します。そして国民党のイデオロギイの中心をなす孫文の民族主義と対比することによってこの問題を解こうとしています。この分析はきわめて鋭い。

まず戴季陶は、軍国主義というものを厳密に定義しています。軍国主義は、単なる思想ではなくて制度を指します。

「その制度とは、軍事組織の力を政権の重心にすえるものであり、すべての政治勢力を軍事勢力に従属させ、すべての政治組織を軍国組織に従属させるもの」と定義するわけです。したがって、国の大小、軍隊の大小という量的な比較の問題ではないわけです。たとえば、帝国主義の大国であるイギリスやアメリカは軍国主義国家ではないが、小国であるモンテネグロは軍国主義国家であるとかれば

見えています。

日本はどうかというと、日露戦争のあと、明らかに軍国主義国家になったとして、きわめて詳しく、また実証的に、日本の政治機構を分析しておりまして、この理解は正確であると申さねばなりません。ここには詳しいことは省きますが。

この軍国主義は、世界的風潮としては、第一次世界大戦によって一応破産するわけでありまして。日本でも政党政治への要求がおこります。ところがそれが成功しないで、軍国主義によって巻き返されてしまった。その間の事情は、これは戴季陶は直接説いてはおりませんが、私の想像を交えて申しますと、日本では政党が、当初の自由党の結党からして、金権と結びついたもので、最初から腐敗していたことに原因があると思われまして。自由党と改進黨という「日本最初の二大政党の後身は、すべて軍閥、官僚の軍門に降った」と戴季陶は見えております。

政党政治が日本では成立しなかつた。戴季陶の考え方では、政党というものは、確乎たる独立性がなければ生命を維持できないものであり、その独立性を維持するには革命性が必要だということですから、そういう眼で見ると、日本には政党の名があつて政党の実がないことになるのは当然であります。まことに耳の痛い話です。

私が『日本論』を読んで、もつとも感銘する点は、国家と民族とを峻別した上で両者を関係づけている基本的な考え方の点であります。これは戴季陶の独自の考え方というより、かれは孫文の考え方

をそのようにとらえ、それにのっとって自説を展開しているのでありますから、孫文がそうだとってもよろしいし、もっと広げて、中国人一般がそうだとってもよろしい。この点に関しては国民党と共産党とを問わず、一致していると思います。われわれの場合、いろいろの歴史事情からして、とかく民族と国家を一体視しがちであります。一つには明治国家のある意味での優秀性が、この思考習性を助長しているのでありましょう。しかしこれはまずい。少なくとも中国に関して、中国の革命の実態をとらえそこなった原因の大半がここにあるのではないかとさえ考えます。

戴季陶の考えでは、あるいは孫文の考えと申してもよろしいが、民族は自然の力でつくられたものであり、国家は人為的に、武力でつくられたものだということです。すなわち、民族はそれ自体が目的であるのに反して、国家は、民族の生存と発展のための手段なのです。したがって国家は、随時変遷が可能だが、民族は抹殺できない。

現在の世界では、すなわち中国流にいうと大同のまだ実現しない現状では、自然存在である民族は否定できない。そして民族の存在は他との関係で意識化されるのだが、民族の生存の対象はあくまで世界である。こういう民族観、それを民族主義と申しますが、そういう民族主義の立場では、当然に民族と民族との関係が平等になるはずである。民族は生存のために力を必要とし、当然に国家を要求するが、民族主義の国家は、他を圧迫することはありません。「一民族を主体とする国家が、他民族の国家を圧迫するのは、国家主義または帝国主義であって、民族主義ではない」という信念が牢固

として貫いております。これが孫文の革命原理であると同時に、おそらく今日の文化大革命の一つの原理でもありましょう。

戴季陶の見方によりますと、日本は、民族主義の国家をつくらずに、国家主義の国家をつくってしまった。そのために否応なく軍国主義に傾斜してしまった、ということです。これを私が敷衍して申しますと、中国には理想はあったが、その理想を実現するための力が不足であった。日本は、力はあったが、力あまって力の崇拝になり、逆に理想を力に埋没させてしまった、と申せましょう。このように戴季陶の批判を受けとりますならば、それはほとんどタゴールの日本批判とも一致するのであります。

残された問題はまだまだたくさんありますが、その中からほんの一つ二つを拾い出して、話を終わりたいと思います。

『日本論』は、日本の国策が決定されて、もはや変更不能になった時点で、中国革命との融和が望みえなくなった緊迫した時点で、日本の全文明を批判するという必要から書かれた事情は前に申しあげました。したがってこの本の中心テーマは、当然に明治維新の評価ということになります。なぜなら日本民族は、明治維新と、および明治国家の形成において、はじめて独自性を示し、世界の文明に寄与したのですから。

誤解があるといけません、それを恐れずにあえて単純化いたしますと、日本民族が明治維新で独

自の力を発揮できたのは、戴季陶の理解によりますと、独自の神権の迷信が基礎にあったからであります。同時にそのことが、文明の普遍性を認めたがらぬ習性と表裏一体であるために、その後の建設の途上で失敗に終わった理由になるわけです。

日本の固有の文明は貧弱きまわるものであったが、中国文明とインド文明を取り入れることによって、はじめて古代国家の成立が可能になったとかれは見ます。その後の数百年、あるいは千年近い経過で、輸入文明は完全に民族的に消化吸収されて、それが西洋文明を吸収する土台になった。この外来文明の同化による変質という着眼は、たいへんおもしろい。

たとえば中国文明について申しますと、本来の儒教、あるいは儒教と申さないでもよろしいのですが、漢民族の固有の精神形態と、日本に土着化されたそれとは、まったくちがう。かれは古学派の祖である山鹿素行を代表としてこの問題を論じております。かれによれば、本来の儒教の根本精神は、仁と天下大同思想である。これは単純化して申しますと人間の同質性、および国際間の平等を意味する普遍原理です。しかるに山鹿素行によって、神権の迷信を理論化する素材に転用されたと申します。

戴季陶の認識方法は、一民族の長所と短所は同時に存在するというところにあるように思われます。山鹿素行によるこうした質的転換は、一方では本来の普遍原理としての性格を失うわけですが、同時にそれによって民族の自尊心を強め、それが民族発展の基礎になったことも認めるわけであります。

明治維新について申しますと、尊王攘夷と開国進取は、それ自体矛盾であるが、その矛盾こそ発展の基礎であるというところをえ方をします。

いかにも普遍原理は尊い。それを数千年前に発見した中国文明はすばらしい。しかし、いかにすばらしくても、それを實現する力がなくては自慢にならない。力の獲得において努力を忘れていた中国人は恥じてあれ、と戴季陶は自国民を鞭うちます。

その力とは何か。かれはそれを信仰とよびます。信仰とは、原理または理想へ向っての献身ということであつて、打算とは正反対のものです。したがつて日本語の信仰とはいくらかニヒアンスがちがいます。信仰心、または信念とよぶほうが適切かもしれません。かれは日本の民衆の間に、そうした心情が強く残っているのをうらやましがり、中国人が打算的なのを非難しております。また、通説に反して、ロシア革命の成功を「反宗教という宗教」の力によるものだと力説しております。また、自国の歴史にある義和団の運動を、盲目的な排外運動という点で理性では批判しながら、民族の元気の發露という点では肯定的に評価しております。

そんなわけですから、日本の中国への侵略を非難するといつても、ただ泣き言をいつているのではありません。非難の眼目は、道義に反する、すなわち民族主義の普遍原理にもとるといふのであつて、したがつて同時に、普遍原理を自覚しながらそれを實現する力のない自国の不甲斐なさを警め、努力奮闘を鼓舞することがセットになっているのであります。侵略者は侵略という行為において非難さ

れるが、被侵略者もまた、侵略を可能にした弱体において非難に値するという論理であります。数年前か十数年前か忘れましたが、日本から民間の代表で中国へ行った人が、会見の席で周恩来総理に向かって過去の侵略の罪をわびたところ、相手は、いや、自分のほうにも侵略を許した責任があると答えたという話をきいたことがあります。この点では戴季陶と周恩来との間に差はありません。

われわれはかつて戴季陶から「尚武」の民とよばれました。尊敬をもってよばれました。武とは力のことであり、力は信仰にもとづくものであります。すなわち原理または普遍価値への忠誠と、およびその実現を目ざして奮闘することを意味します。打算ぬきに献身するのが「尚武」のはずです。いまやこの気風は地をはらったのでしょうか。戴季陶が『日本論』を書いた時代と今とでは、日本と中国の地位が逆になったようです。打算と献身とが逆になりました。そのことを自覚的に確認するためだけでも『日本論』は再読の価値があるでしょう。

追記

中国人の書いた日本および日本人論の二巨冊として、黄遵憲の『日本国志』と『日本雑事詩』、戴季陶の『日本論』、それから周作人の一連のエッセイを挙げたいと私は思います。どれも独特の史眼と洞察力をそなえていて、われわれを裨益すること多大であります。また、西洋人の書いた日本論にく

らべて、いささかもひけをとるものではありません。

このうち『日本雑事詩』は、実藤萬秀氏の日本訳が平凡社の東洋文庫の一冊として出ております。

『日本国志』の訳はないが、この本の解説のなかで言及されています。

周作人のエッセイは、戦争中にたくさん訳されましたが、かれが不幸にも協力者の運命に陥つたために、そのことへの気がねから、戦後は日本側で遠慮して訳書の出版をさしひかえているようです。これはある意味では、真の友好のために非常に残念だと申すほかありません。

日中関係の過去百年を回顧するとき、以上の三点は、われわれにとって欠かせない文献でありました。自厝たるゆえんです。けれども、そのなかからもし一点だけを選ぶとすれば、まず戴季陶に指を屈するのが自然ではないでしょうか。その理由を私の立場で述べたものが、この紹介文であります。はじめ潮出版社の依頼で若い人たちの前でしゃべり、それを後から文章にしたもので、雑誌『潮』の一九六九年四月号にのりました。いま、社会思想社の好意によって『日本論』が一本にまとまるに際して、私としてこれにつけ加えることがないので、そのまま使わせて頂きます。(一九七一年十月)